本庄市遺跡調査会報告書　第26集

女 池 遺 跡 Ⅲ

―Ｃ地点の調査―

２００９

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

本庄市遺跡調査会報告書　第26集

女池遺跡（めいけいせき）Ⅲ

―Ｃ地点の調査―

２００９

本庄市遺跡調査会

序

本庄市は、かつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一生誕の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は本庄市児玉町吉田林に所在する女池遺跡の発掘調査の成果を記録したものです。今回の発掘では、奈良時代と考えられる炭焼きに用いた土坑がまとまって発見されました。女池遺跡からは他地点の調査においても、古墳時代に遡る炭焼き土坑や鞴の羽口、鉄滓などの製鉄関連遺物、さらには工房と想定される長方形の竪穴住居などが検出されていますが、今回の奈良時代と推測される炭焼き土坑の発見は、女池遺跡周辺に古墳時代以降長期にわたって、地域の鉄生産の拠点が存在していた可能性を考えさせるものといえましょう。

貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、歴史を明らかにすることはよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、文化財の保護に対する深いご理解を賜りました池田常雄氏をはじめ、調査に際してご指導、ご協力を頂きました方々、直接作業の労にあたられた皆様に衷心よりの感謝を申し上げます。

平成 21 年 3 月

本庄市遺跡調査会
会　長　　茂　木　孝　彦

例　　言

1．本書は埼玉県本庄市児玉町大字吉田林字藤池 73 に所在する女池遺跡 C 地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は池田常雄氏の共同住宅建設に伴う事前の記録保存を目的として、本庄市遺跡調査会（旧児玉町遺跡調査会）が実施した。調査対象面積は約 70 ㎡である。

3．発掘調査、整理調査に係る詳細は以下のとおりである。

・発 掘 調 査 期 間：平成 8 年 10 月1日　～　平成 8 年 10 月 31 日

・発掘調査担当者：徳山 寿樹（旧児玉町遺跡調査会　調査員）

・整 理 調 査 期 間：平成 20 年 7 月 25 日　～　平成 21 年 3 月 15 日

4．発掘調査から本書刊行に至る経費は、池田常雄氏が負担した。

5．整理調査は有限会社歴史考房まほらに委託し、笠原仁史が担当した。

6．本書の執筆は I を本庄市教育委員会事務局が、その他を笠原が担当し、編集は笠原が担当した。図版に掲載した遺物写真は山際哲章が撮影した。

7．発掘調査資料・出土遺物等、本調査に関する全ての資料は本庄市教育委員会において保管・管理している。

8．発掘調査から報告書刊行に至るまで下記の諸氏・諸機関に御助言・御指導・御協力を賜りました。（50 音順・敬称略）

大嵩崎泰明　中里正憲　長井正欣　有限会社 毛野考古学研究所

9．本調査に本庄市遺跡調査会の組織は以下のとおりである（平成 20 年度）。

会 長	茂 木　孝 彦	本庄市教育委員会教育長	
理 事	清 水　守 雄	本庄市文化財保護審議委員	
	佐々木　幹雄	〃	
	丸 山　茂	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）	
監 事	八 木　茂	本庄市監査委員担当副参事	
	小 谷 野　博	本庄市参事兼会計課長	
幹 事	儘 田　英 夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）	
	鈴 木　徳 雄	〃	課長補佐兼文化財保護係長
	太 田　博 之	〃	埋蔵文化財係長
	恋河内　昭彦	〃	埋蔵文化財係主査
	大 熊　季 広	〃	埋蔵文化財係主任
	松 澤　浩 一	〃	埋蔵文化財係主任
	松 本　完	〃	埋蔵文化財係主事
	的 野　善 行	〃	臨時職員

凡　　例

1．本書に使用した地図は、国土地理院発行『数値地図 25,000（地図画像）宇都宮』（平成 15 年 11 月 2 刷）である。

2．本書掲載図の縮尺は各図に示したとおりである。

3．掲載図の方位は「女池遺跡 A･B･D 地点」、および「本庄市現況図（1/2,500）」を参考に座標北を割り出したものであるが、国家座標値は算出できなかった。また、水準値は調査区西側の木杭を基点水準 0 とする任意標高である。

4．遺物観察表の色調は『標準土色帖』（財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

5．本書に記載した遺構名は発掘調査時に付したものを使用した。

目　　次

序
例言・凡例
目　次
Ⅰ　調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 1
Ⅲ　基本土層 …… 4
Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 5
（1）　焼成土坑 …… 6
（2）　溝 …… 8
（3）　河川跡 …… 8
（4）　遺構外の遺物 …… 8
Ⅴ　まとめ …… 9

写真図版
抄　　録

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図 …… 2
第 2 図　遺跡周辺図 …… 3
第 3 図　遺跡全体図、基本層序 …… 5
第 4 図　1 ～ 4 号焼成土坑 …… 7
第 5 図　1 号溝 …… 8
第 6 図　遺構外出土遺物 …… 8

表 目 次

第 1 表　周辺遺跡一覧表 …… 4
第 2 表　出土遺物観察表 …… 8

写 真 図 版 目 次

PL-1　遺跡全景
PL-2　1 ～ 4 号焼成土坑　／　1 号焼成土坑炭化材出土状況　／　1 号焼成土坑　／　2a・2b 号焼成土坑　／　2a 号焼成土坑
PL-3　3 号焼成土坑炭化材出土状況　／　3 号焼成土坑　／　4 号焼成土坑炭化材出土状況　／　4 号焼成土坑　／　1 号溝　／　出土遺物（遺構外・1 号溝・1 号焼成土坑・1 号溝）

Ⅰ　調査に至る経過

平成 7 年 8 月 15 日、児玉郡児玉町大字吉田林字藤池 72 番地－ 1 他（現本庄市児玉町吉田林字藤池 72 番地－ 1 他）の開発工事を計画している池田常雄氏より、同開発予定地内の埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会（当時）に照会があった。

児玉町教育委員会では、照会のあった開発予定地内を児玉町 (現本庄市) の「遺跡分布地図」と照合したところ、周知の埋蔵文化財包蔵地である№. 54 － 121 遺跡（条里遺跡）の範囲内に位置し、かつ№. 54 － 305 遺跡（女池遺跡）の隣接地であったため、照会のあった区域は、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が認められるところから、現状を変更しようとする場合は、町教育委員会と協議するとともに埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、文化財保護法の規定に則って事業を実施する旨を回答した。その後、池田氏から試掘調査依頼書が町教育委員会に提出されたことにより日程を調整のうえ試掘調査を実施した。この結果、埋蔵文化財包蔵地であることが確認され、開発予定地は「埋蔵文化財の所在が確認されたところから現状で保存することが望ましい。やむを得ず現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会とその保存措置について協議し、文化財保護法第 57 条の 2 の規定により埋蔵文化財発掘届を提出すること」などを伝えた。

その後、池田常雄氏からは、諸事情が生じたため開発面積を縮小して改めて平成 8 年 6 月 12 日に開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会が再提出された。そして、池田氏と町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、共同住宅（アパート）の建設予定のため現状で保存することが極めて困難であることから、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査に関わる届出は、平成 8 年 9 月 18 日に児玉町遺跡調査会会長より、「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、同じく池田氏より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出されている。尚、埼玉県教育委員会からは、平成 8 年 9 月 30 日付け教文第 3 － 377 号によって発掘調査の指示通知があった。

発掘調査の実施にあたっては、児玉町教育委員会の指導に基づいて池田氏と児玉町遺跡調査会との間で、平成 8 年 12 月 10 日に発掘調査に関する委託契約を締結し、同 10 月 1 日から現地での発掘調査が実施された。

（本庄市教育委員会事務局）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

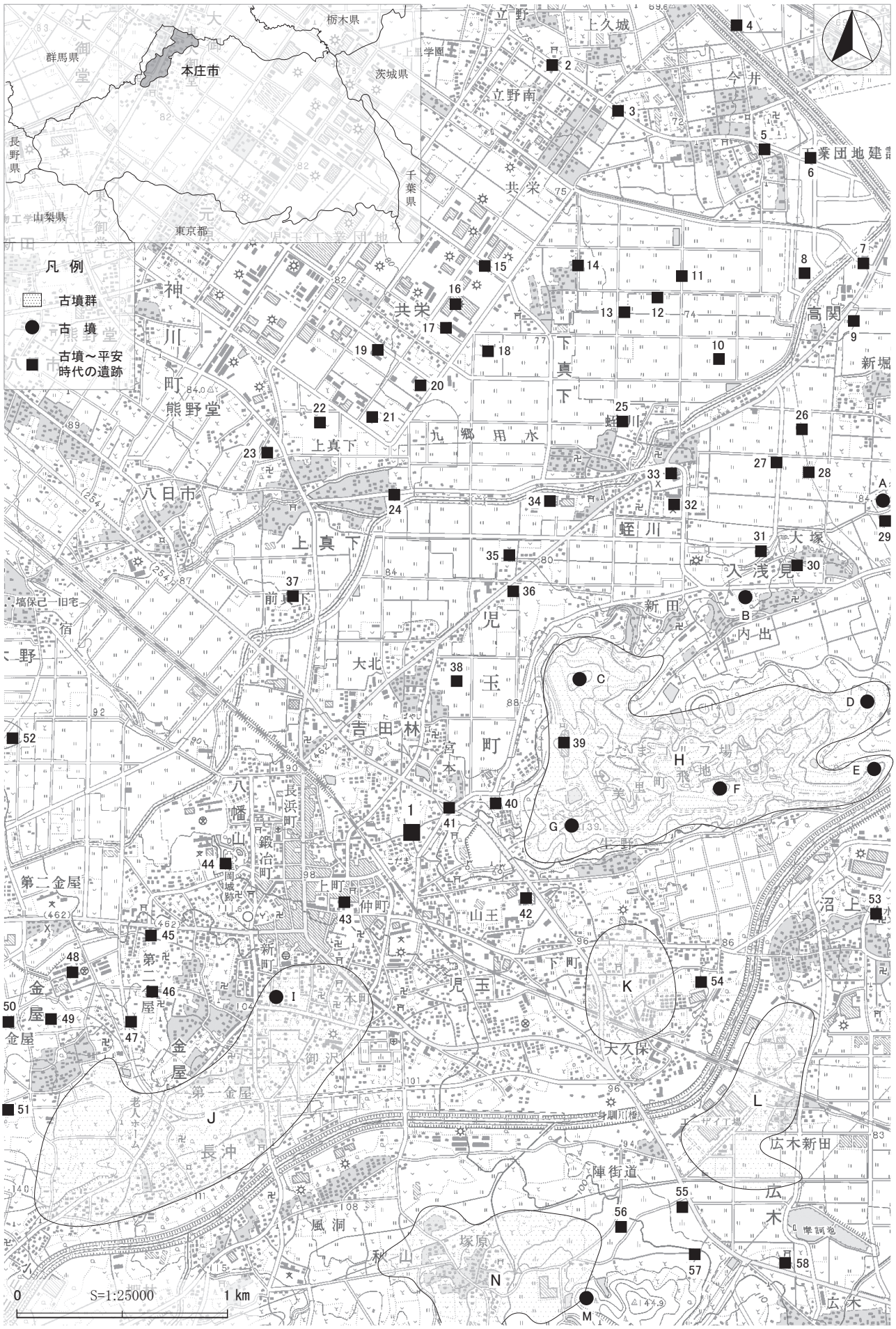
遺跡は児玉丘陵と、その残丘である生野山との間、児玉町市街地の北東に隣接する位置にあり、地形的には生野山（残丘）下に広がる低台地上に立地している。また、周辺には女堀川の開析作用によって形成された児玉丘陵下から北東に広がる本庄台地縁辺部、残丘上および残丘下低台地上に集落遺跡が数多く点在するが、弥生から古墳時代初頭に該当する遺跡は少なく、生野山遺跡 (38) など残丘上や残丘下低台地にわずかに見られるのみである。当地域において大きく集落が展開するのは古墳時代前期に入ってからであり、大規模集落である後張遺跡 (7) を中心に周辺の低台地上や残丘上などにも小規模集落が数多く形成されるようになる。また、残丘上には県内最古の古墳の一つで全長 60m の前方後方墳である鷺山古墳 (A) の築造も認められる。

中期に入ると蛭川坊田遺跡(33)などに見られるように低地内でも水路の掘削が顕著になり、さらに大きく集落が展開する様相が窺える。また、東牧西分遺跡(9)に見られるように比較的早い段階にカマドが普及する地域としても注目されているが、南東の残丘上においては集落の形成が途絶え、金讃神社古墳(B)・生野山将軍塚古墳(F)など円墳を主体とする首長層の墓が継続的に造られるようになるなど、広い範囲において地形的な利用区分が意識されていた傾向が窺える。

後期も残丘上には全長60m級の前方後円墳である生野山銚子塚古墳(C)・生野山16号墳(E)が築造され、その後、生野山古墳群(H)などの群集墳が形成されるようになるが、集落は数を増しつつも7世紀中葉になると低地内の自然堤防上から本庄台地縁辺部や残丘下低台地上に移行する傾向が窺える。

奈良時代に入ると、7世紀中葉以降に沖積地を取り囲むように分布した集落がさらに範囲を広げ、本庄台地縁辺部では将監塚遺跡(15)・古井戸遺跡(16)・南共和遺跡(19)・新宮遺跡(21)・辻ノ内遺跡(22)・真下境東遺跡(23)など帯状に連続する広大な居住域が9世紀まで断続的に営まれるようになる。その後、9世紀後半になるとこうした状況は一変し、変わって自然堤防上に小規模な集落が形成されるようになる。一方、残丘上および残丘下低台地上の集落は鷺山南遺跡(29)・新屋敷遺跡(30)・阿知越遺跡(40)など10世紀以降も集落が数多く形成されており、古代の居住域として最適な場所であったことが示唆される。

第1図 遺跡位置図


本庄市
栃木県
群馬県
茨城県
長野県
千葉県
山梨県
東京都
凡 例
古墳群
古 墳
古墳～平安時代の遺跡
S=1:25000
0
1 km

第 2 図　遺跡周辺図

第 1 表　周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	概　　要
1	女池遺跡 C 地点	本報告書掲載：奈良時代焼成土坑
2	熊野太神南	古墳～奈良時代の集落跡
3	今井遺跡群	古墳・奈良平安時代の集落跡
4	九城前	古墳
5	今井北廓	奈良時代の集落跡
6	一丁田	条里跡
7	後張	古墳・奈良平安時代の集落跡
8	今井川越田	条里跡
9	東牧西分	古墳・奈良平安時代の集落跡
10	柿島	条里跡
11	前田甲	古墳・奈良平安時代の集落跡
12	藤塚	条里跡
13	堀向	条里跡
14	将監塚東	縄文・奈良平安時代の集落跡
15	将監塚	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
16	古井戸	旧石器、縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
17	古井戸南	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
18	平塚	縄文・古墳時代の集落跡
19	南共和	奈良平安時代の集落跡
20	塚畠	旧石器、古墳・奈良平安時代の集落跡
21	新宮	縄文・奈良平安時代の集落跡
22	辻ノ内	奈良平安時代の集落跡
23	真下境東	奈良平安時代の集落跡
24	上真下東	古墳・奈良平安時代の集落跡
25	左口	条里跡、奈良平安時代の集落跡
26	浅見境北	古墳・奈良平安時代の集落跡
27	武井橋	古墳・奈良平安時代の集落跡
28	浅見境	古墳・奈良平安時代の集落跡
29	鷲山南	古墳・奈良平安時代の集落跡
30	新屋敷	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
31	城の内	弥生・古墳時代の集落跡
32	共和小学校校庭	条里跡、古墳・奈良平安時代の集落跡
33	蛭川埴輪窯跡	埴輪窯跡
34	蛭川坊田	平安時代の集落跡
35	辻堂	古墳・奈良平安時代の集落跡
36	南街道	縄文・古墳時代の集落跡
37	金佐奈	古墳・奈良平安時代の集落跡
38	宮田	平安時代の集落跡
39	生野山	古墳時代の集落跡
40	阿知越	縄文・奈良平安時代の集落跡
41	御林下	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
42	児玉清水	縄文・弥生・古墳・奈良平安時代の集落跡
43	町後東	古墳時代の集落跡
44	八幡山埴輪窯跡	埴輪窯跡
45	金屋北原	古墳・奈良平安時代の集落跡
46	金屋西	弥生・古墳・奈良平安時代の集落跡
47	倉林東	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
48	金屋池脇	古墳・奈良平安時代の集落跡
49	倉林後	古墳・奈良平安時代の集落跡
50	念仏塚	古墳・奈良平安時代の集落跡
51	高柳原	古墳・奈良平安時代
52	十二天	古墳・平安時代の集落跡
53	水殿瓦窯跡	瓦窯跡
54	大久保	古墳・平安時代の集落跡
55	秋山大町東	古墳時代の集落跡
56	秋山大町	古墳時代の集落跡
57	諏訪平	縄文・古墳・奈良平安時代の集落跡
58	ミカ神社前	古墳・奈良平安時代の集落跡

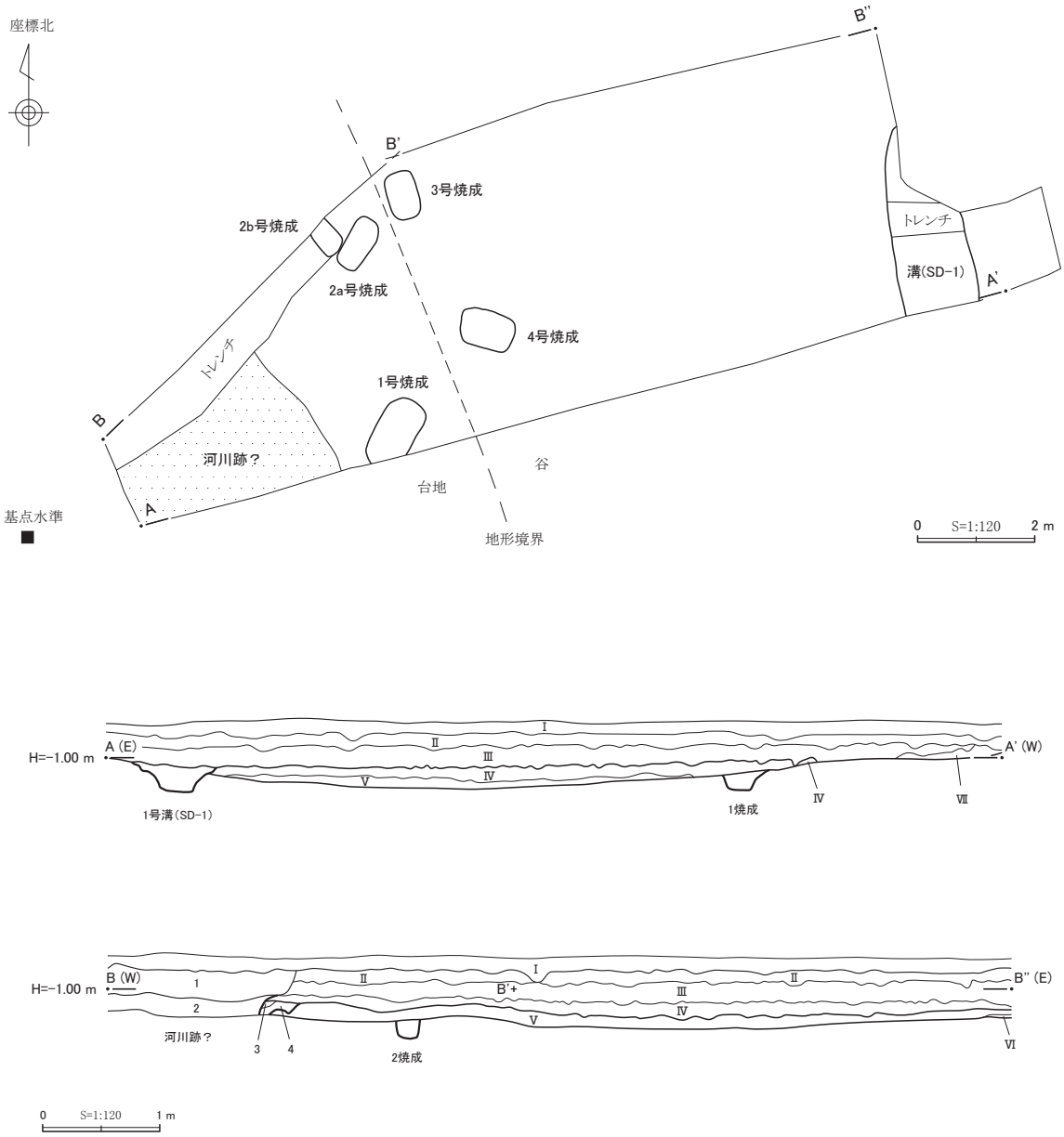
古墳一覧表

No.	古　墳　名	No.	古　墳　名	No.	古　墳　名	No.	古　墳　名	No.	古　墳　名
A	鷲山古墳	D	熊谷後 1 号墳	G	物見塚古墳	J	長沖古墳群	M	秋山諏訪山古墳
B	金鑽神社古墳	E	生野山 16 号墳	H	生野山古墳群	K	下町古墳群	N	秋山古墳群
C	生野山銚子塚古墳	F	生野山将軍塚古墳	I	長沖 14 号墳	L	広木大町古墳群		

Ⅲ　基本土層

本遺跡の基本層序は調査区南北両壁で観察された。表土および直下層（Ⅰ・Ⅱ層）は As-A を多量に含む現代～近代の耕作土であり、Ⅲ層以下は締まり・粘性の強い粘質土と砂礫層が堆積する。総体的に河川の影響を大きく受けて形成された地形と考えられ、焼成土坑群を境に東側の地形が谷状に下がる傾向が窺える。

本調査で確認された焼成土坑はⅤ層下端で、溝はⅣ層上面で確認された。また、河川跡はⅣ層まで及ぶ撹乱下に検出されたが、Ⅴ層上面からの落ち込みも認められる。



調査区南北壁 土層説明

1．明灰色土。ビニール含有。撹乱。
2．暗灰色砂利層。鉄分多量含有。河川性砂利。
3．暗褐色粘質土。Φ1～5㎜程度の河川性礫多量含有。
4．暗褐色粘質土。Vb層より河川性礫多量含有。

Ⅰ．明灰色土。As-A非常に多量含有。しまり・粘性なし（現代耕作土）。
Ⅱ．明灰色土。As-A非常に多量含有。しまりあるが粘性なし（近代耕作土）。
Ⅲ．暗褐色粘質土。しまり・粘性共に強い（As-A・As-B混入なし）。旧表。
Ⅳ．明褐色粘質土。しまり・粘性共に強い。
Ⅴ．暗褐色粘質土。しまり・粘性共に強い。
Ⅵ．黒褐色粘質土。しまり・粘性共に強い（有機質のような谷にある黒色土）。
Ⅶ．砂礫。Φ5～100㎜程度の川砂利多量含有。

第 3 図　遺跡全体図、基本層序

Ⅳ　検出された遺構と遺物

5 基の焼成土坑と 1 条の溝が検出された。遺物は 1 号焼成土坑土坑から土師器片が少量、1 号溝から土師器片、鉄製品が各 1 点、遺構外から土師器小破片が僅かに出土のみである。

（1） 焼成土坑

1 号焼成土坑（SK-1）

位置 調査区西寄り南端部に位置する。 **形状・規模** 南東角が調査区外へ拡がっているが、確認状況において平面は隅丸方形を成し、壁は直立する。主軸 N-24°-E、長軸（南北）128 ×短軸（東西）71 ×深さ 30 ㎝を測る。 **覆土** 焼土･炭化粒含有の暗褐色土を主体とするが、自然か人為堆積かは判断し難い。なお、底面には 1 ㎝程の厚みを持つ炭化（灰）層が認められる。 **備考** 壁面上～中位にかけて部分的ではあるが被熱（焼土）が認められる。 **遺物** 覆土中から土師器小破片が数点出土している。掲載遺物なし。 **時期** 時期判断できる出土遺物はないが、付近に真間期を主体とする土師器片が散在することから、奈良時代に該当することが推測される。

2a 号焼成土坑（SK-2a）

位置 調査区西寄り北部に位置し、2b 号焼成土坑の南に隣接する。 **形状・規模** 確認状況において平面は隅丸方形を成し、壁は直立する。主軸 N-27°-E、長軸（南北）93 ×短軸（東西）48 ×深さ 18 ㎝を測る。 **覆土** 白色粒含有の暗灰色粘質土を主体とするが、自然か人為堆積かは判断し難い。なお、底面には 1 ㎝程の厚みを持つ炭化（灰）層が認められる。 **備考** 壁面上位に部分的ではあるが被熱（焼土）が認められる。 **遺物** 遺物は出土していない。 **時期** 出土遺物等がなく判断し難いが、遺構形態の類似から 1 号と同時期が考えられる。

2b 号焼成土坑（SK-2b）

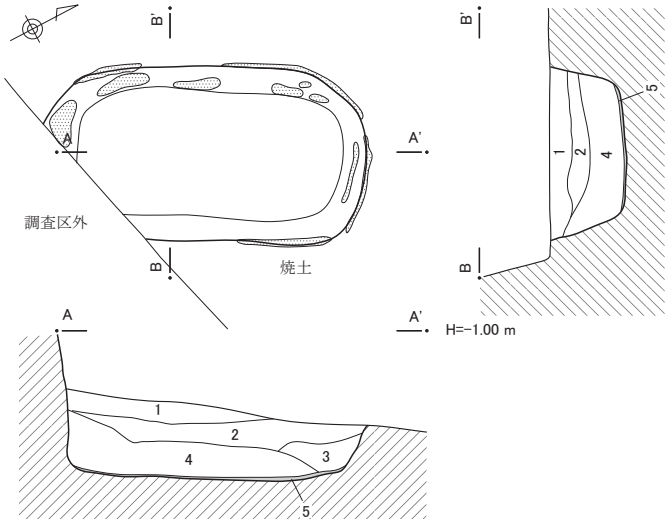
位置 調査区西寄り北端部に位置し、2a 号焼成土坑の北に隣接する。 **形状・規模** 北西側が調査区外へ拡がっているが、確認状況において平面は隅丸方形を成し、壁は直立する。主軸 N- 46°-W、長軸（南北）58 ×短軸（東西）41 ×深さ 32 ㎝を測る。 **覆土** 不明。 **備考** 壁面上位に部分的ではあるが被熱（焼土）が認められる。 **遺物** 遺物は出土していない。 **時期** 出土遺物等がなく判断し難いが、遺構形態の類似から 1 号と同時期が考えられる。

3 号焼成土坑（SK-3）

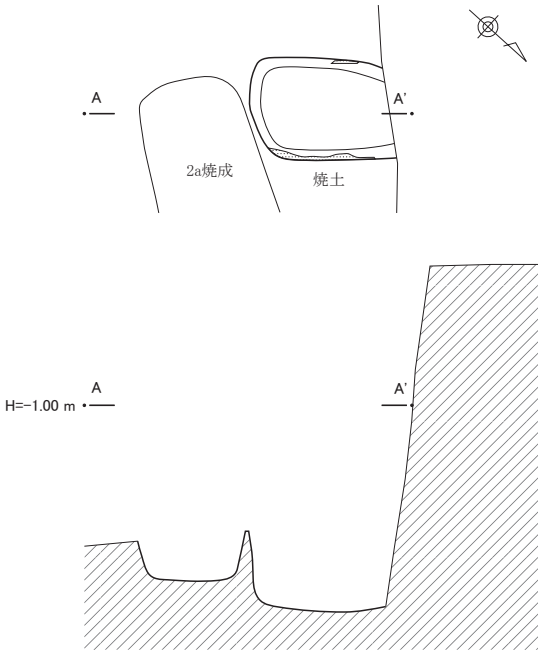
位置 調査区西寄り北端部に位置し、2a・2b 号焼成土坑の東に近接する。 **形状・規模** 確認状況において平面は隅丸方形を成し、壁は直立する。主軸 N- 22°-W、長軸（南北）82 ×短軸（東西）53 ×深さ 31 ㎝を測る。 **覆土** 白色粒含有の暗灰色粘質土を主体とするが、自然か人為堆積かは判断し難い。なお、底面には 1 ㎝程の厚みを持つ炭化（灰）層が認められる。 **備考** 壁面上～中位に部分的ではあるが被熱（焼土）が認められる。 **遺物** 遺物は出土していない。 **時期** 出土遺物等がなく判断し難いが、遺構形態の類似から 1 号と同時期が考えられる。

4 号焼成土坑（SK-4）

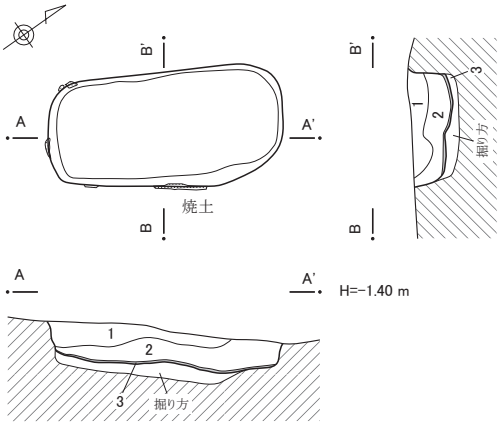
位置 調査区西寄り中央部付近に位置する。 **形状・規模** 確認状況において平面は隅丸方形を成し、壁は直立する。主軸 N- 75°-W、長軸（東西）95 ×短軸（南北）65 ×深さ 20 ㎝を測る。 **覆土** 焼土・炭化粒含有の暗灰色粘質土を主体とするが、自然か人為堆積かは判断し難い。なお、底面には 1 ㎝程の厚みを持つ炭化（灰）層が認められる。 **備考** 壁面上～中位に部分的ではあるが被熱（焼土）が認められる。 **遺物** 遺物は出土していない。 **時期** 出土遺物等がなく判断し難いが、遺構形態の類似から 1 号と同時期が考えられる。



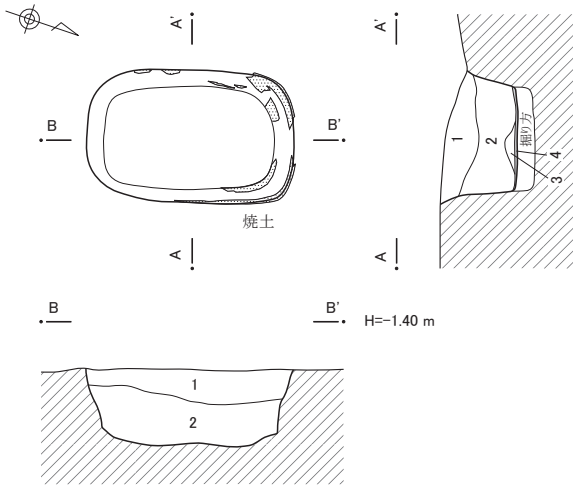
1号焼成土坑(SK-1) 土層説明
1. 暗褐色粘質土。しまり粘性強い。白色微粒子若干含有。
2. 暗褐色土。しまり粘性強い。白色微粒子若干、黄色粘質土粒Φ1～20㎜多量含有。
3. 暗褐色土。しまり粘性強い。焼土微粒子(Φ1㎜程度)多量含有。
4. 暗褐色土。しまり粘性強い。焼土微粒子・炭化物粒多量含有。
5. 黒色炭化物。しまり粘性強い。炭化層(灰層)。



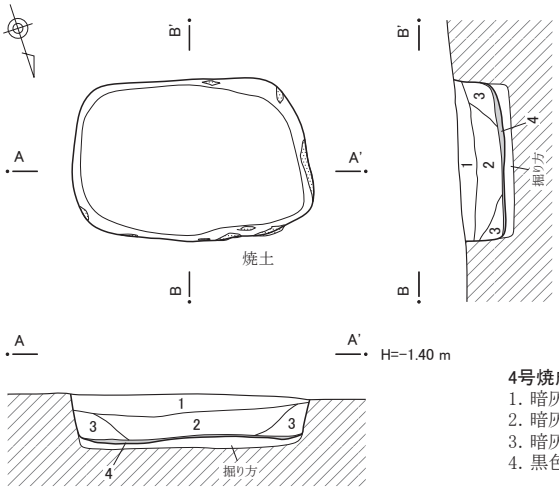
2b号焼成土坑(SK-2b)



2a号焼成土坑(SK-2a) 土層説明
1. 暗灰色粘質土。粘性・しまり非常に強い。白色微粒子・鉄分含有。
2. 暗灰色粘質土。1層と類似するが白色微粒子否含有。
3. 黒色炭化質土。炭化物層。



3号焼成土坑(SK-3) 土層説明
1. 暗灰色粘質土。しまり・粘性強い。白色微粒子含有。
2. 暗灰色粘質土。1層に類似するが、色調やや暗く白色・黄色微粒子少量含有。
3. 暗灰色粘質土。しまり・粘性強い。Φ1～5㎜の黄色粒やや多く含有。
4. 黒色炭化層。炭化物層。



0　S=1:30　1 m

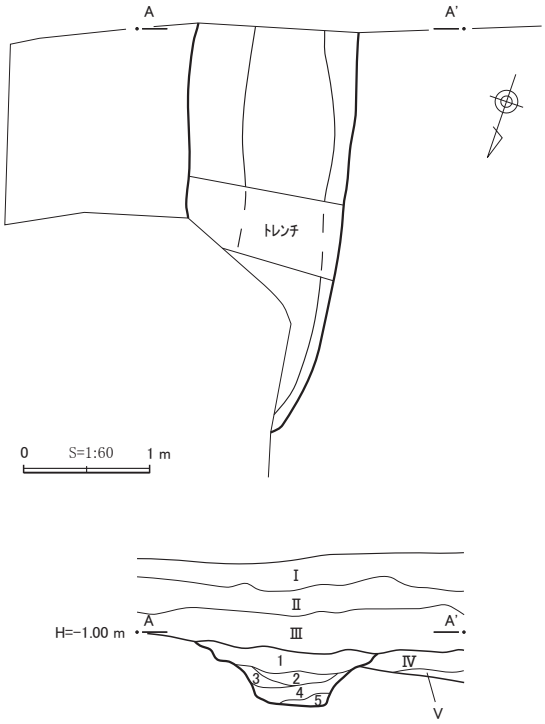
4号焼成土坑(SK-4) 土層説明
1. 暗灰色粘質土。しまり・粘性強い。Φ1㎜以下の白色微粒子及びマンガン・鉄斑含有。
2. 暗灰色粘質土。しまり・粘性強い。Φ1～5㎜程度の焼土粒・炭化物粒多量含有。
3. 暗灰色粘質土。しまり・粘性強い。Φ1㎜程度の焼土粒子多量含有。
4. 黒色。炭化物層。

第4図　1～4号焼成土坑

(2) 溝

1号溝（SD-1）

位置 調査区東端部に位置する。 **形状・規模** 両端とも調査区外へと延びているが、確認状況では南北方向に直線的な走向を示し、北端部で緩やかに東に湾曲する様子が窺える。主軸N- 15°-W、長さ(南北）20m 程を測る。断面は逆台形を成し、上幅 92 ×下幅 47 ×深さ 50 ㎝程を測る。**覆土** 鉄分・砂含有の暗褐色粘質土を主体とするが、最上層には As-B が若干含まれる。 自然堆積と判断される。 **遺物** 覆土中から土師器片数十点、鉄製品 1 点、礫 4 点が出土している。写真掲載遺物は土師器片 1 点、鉄製品 1 点、礫 4 点。**時期** 時期判断できる出土遺物がないため判断し難いが、覆土最上層に As-B 含有層が認められることから 12 世紀以降の可能性が高いと考えられる。



1号溝（SD-1） 土層説明
1. 暗褐色粘質土。しまり・粘性強い。As-B若干含有。
2. 暗褐色粘質土。しまり・粘性強い。やや砂質。
3. 暗褐色粘質土。2層に類似するが土質のキメが細かく若干炭化物含有。
4. 暗褐色粘質土。しまり・粘性強い。鉄分・砂含有。
5. 明褐色粘質土。しまり・粘性強い。Ⅳ層風化土であるが鉄分多量含有。
Ⅰ. 明灰色土。As-A非常に多量含有。しまり・粘性なし(現代耕作土)。
Ⅱ. 明灰色土。As-A非常に多量含有。しまりあるが粘性なし(近代耕作土)。
Ⅲ. 暗褐色粘質土。しまり・粘性共に強い(As-A・As-B混入なし)。旧表。
Ⅳ. 明褐色粘質土。しまり・粘性共に強い。
Ⅴ. 暗褐色粘質土。しまり・粘性共に強い。

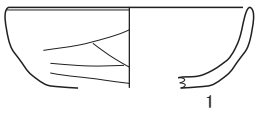
第 5 図 1 号溝

(3) 河川跡

調査区西端の表土直下に南北方向に走る河川跡と思われる地形が確認された。上位は撹乱より落ち込み面は確認できていないが、覆土の主体は砂利層である。また、別にⅤ層上面からの落ち込みも見られ、覆土に河川性礫を多量に含む砂利層が認められる。よって本河川跡は基本層序との照合において焼成土坑より新しく 1 号溝より古い時期と、1 号溝と同時期以降との大きく2時期が考えられる。

(4) 遺構外の遺物

調査区内において数十点の土師器片が出土しているが、いずれも小破片であり掲載遺物は1点のみである。したがって時期判断できる遺物はごく僅かであり、詳細な時期を特定することは不可能である。ただし、掲載遺物および坏の口縁部など器形の特徴を残す数少ない土器片は真間期を主体とする時期に該当する。



第 6 図 遺構外出土遺物

第 2 表 出土遺物観察表

No.	出土状況	種別	器種	計測値（cm）			①色調 ②胎土	③焼成 ④残存	特徴・整形	備 考
				口径	底径	器高				
1	遺構外（調査区内）	土師器	坏	9.8	—	3.2	①橙色 ②砂粒	③普通 ④坏部 1/3	外面：ヘラ削り、撫で。内面：ナデ	計測値は復元値

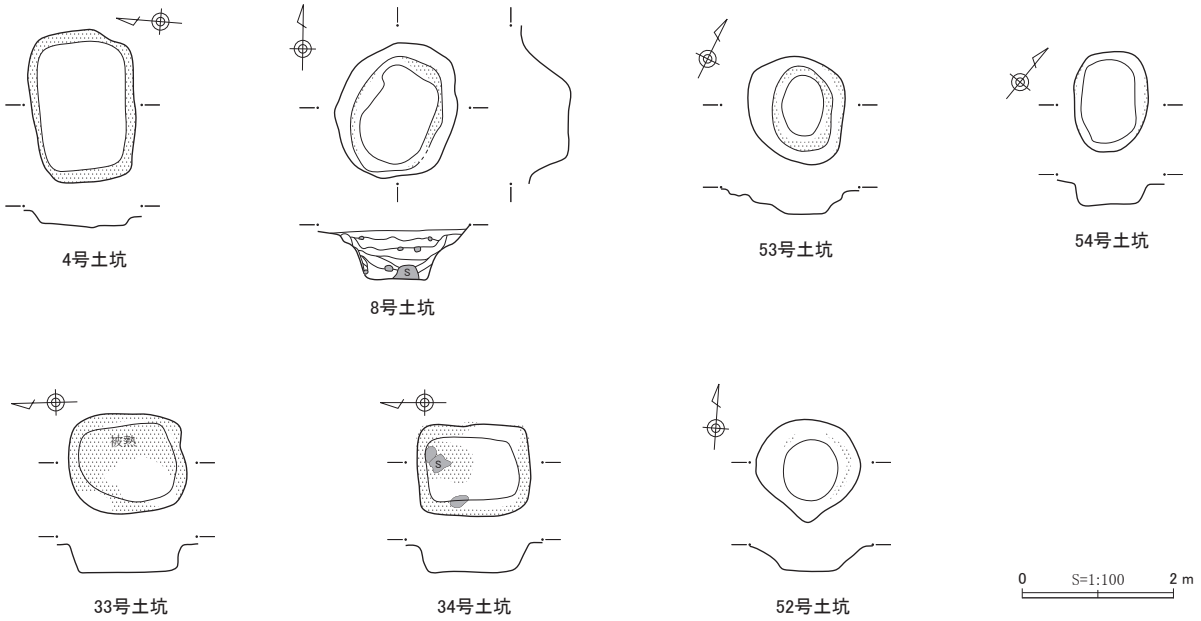
Ⅴ　まとめ

本遺跡で確認された焼成土坑は、その特徴から群馬県で確認されている炭焼き土坑に酷似している。

とは言え、群馬県においても炭焼き土坑は単なる土坑や焼成土坑として報告されているものが多く、遺物の出土例も少ないことから性格・時期とも不明なものがほとんどである。そうした中、大塚昌彦氏は渋川市の半田中原遺跡・薬師遺跡J地点で発見された焼成土坑を基調に群馬県内の報告例をまとめ、共通点として壁面・床面に焼成を受けている点、覆土に炭化物を多く含有している点、群集して発見されることが多い点などを指摘している。また、白井二位屋遺跡（渋川市子持）・新堀東源ヶ原遺跡（安中市松井田）の報告例を加え、製鉄関連遺構・遺物との関係、出土炭化材の種類、民俗事例などから、これらの土坑が奈良平安時代の坑内伏せ焼法による炭焼き土坑と結論付けている。[※1] さらに近年、群馬県では製鉄関連遺構に隣接して炭焼き穴窯や伏せ焼き窯、炭焼き土坑（焼成土坑）など製炭遺構の発見事例が増えているが、既に指摘されているように製鉄では炭焼き窯、小鍛冶では炭焼き土坑と製炭方法と規模に違いがあること、炭材も窯ではクヌギ・コナラ、土坑ではクリが使用されていることが自然科学分析によって明らかにされており、製鉄工程によって意識的に炭材を選別していることが推定される。

本遺跡で確認された焼成土坑は、これら報告事例（図１・2、表１参照）との比較において平面・断面形状、規模、壁面の被熱、底面に多量の炭化材が残存しているなどの特徴が酷似しており、“炭焼き土坑”である可能性が極めて高い。また、本遺跡では製鉄関連遺構の存在、炭材の特定には至っていないが、北に近接する女池遺跡Ａ地点では古墳時代後期の窯状遺構や羽口・鉄滓など製鉄関連遺物が出土しており、奈良時代にも周辺地域において製鉄が行われていたことが十分に考えられる。

今回のまとめについては、本来であれば埼玉県内での報告事例を提示することが当然と思われるが、諸事情により事例調査を行うことができなかった。今後、埼玉県・群馬県での報告事例の確認・蓄積、新たな発見に期待しつつ、遺跡の性格を含む結論については将来への課題としたい。



半田中原・南原遺跡（群馬県渋川市）

図１　群馬県の焼成土坑（1）

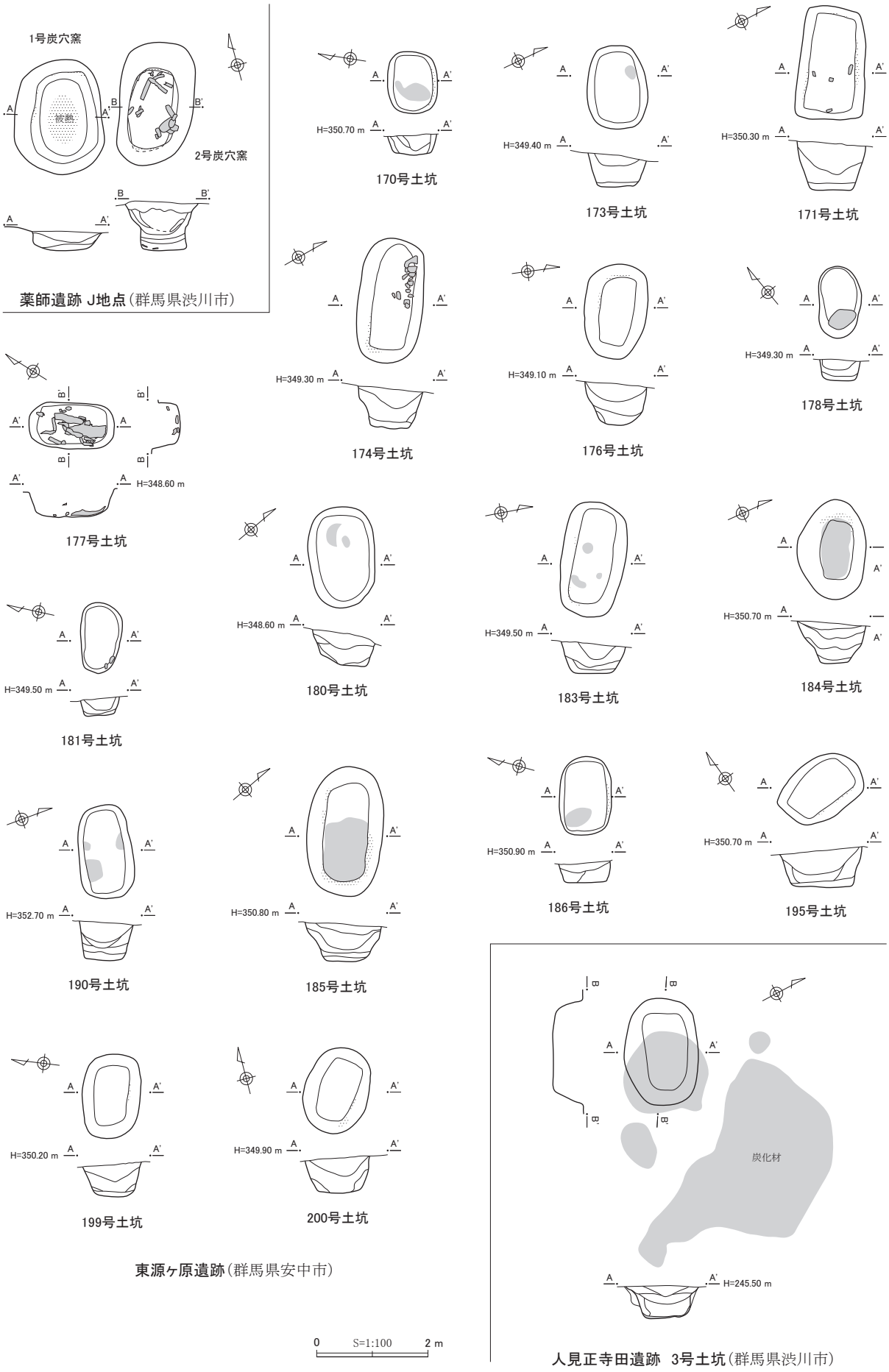


図 2　群馬県の焼成土坑 (2)

表 1　群馬県内の焼成土坑（一部）

遺跡名	遺構名	規模（cm）			平面	断面	主な遺物	時期	備　　考
		長軸	短軸	深さ					
半田中原・南原遺跡	4 号土坑	205	140	15	隅丸長形	皿状	土師器坏・甕、須恵器碗	平安	5 号住居覆土中から掘り込み
	8 号土坑	190	155	73	楕円形	漏斗状	土師器坏、須恵器碗	奈良	
	33 号土坑	160	130	45	不整円形	逆台形	土師器片	奈良	底面被熱
	34 号土坑	150	122	34	長方形	逆台形	土師器片	奈良	底面被熱
	52 号土坑	130	120	34	不整円形	逆台形	なし	不明	
	53 号土坑	145	130	31	不定形	逆台形	なし	不明	
	54 号土坑	120	90	22	楕円形	逆台形	鉄滓多量	奈良	小鍛冶
薬師遺跡	1 号土坑	205	155	42	楕円形	逆台形	炭化材	奈良	底面被熱
	2 号土坑	225	134	85	楕円形	漏斗状	炭化材	奈良	炭化材多量出土
東源ヶ原遺跡	170 号土坑	100	67	36	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	171 号土坑	176	81	85	長方形	逆台形	炭化材	不明	
	173 号土坑	130	80	51	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	174 号土坑	170	72	72	楕円形	逆台形	炭化材	不明	底面カーボン分布
	176 号土坑	123	62	78	楕円形	逆台形	なし	不明	
	177 号土坑	127	70	89	楕円形	逆台形	炭化材多量	不明	炭化材多量出土
	178 号土坑	110	60	42	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	180 号土坑	156	93	62	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	181 号土坑	114	57	30	楕円形	逆台形	炭化材	不明	
	183 号土坑	173	71	55	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	184 号土坑	100	53	74	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	185 号土坑	185	68	57	楕円形	逆台形	炭化材	不明	底面カーボン分布
	186 号土坑	135	78	43	楕円形	逆台形	なし	不明	底面カーボン分布
	190 号土坑	150	73	65	楕円形	逆台形	なし	不明	
	195 号土坑	120	72	70	楕円形	逆台形	なし	不明	
	199 号土坑	108	61	66	楕円形	逆台形	なし	不明	
	200 号土坑	112	67	70	楕円形	逆台形	なし	不明	
人見正寺田遺跡	3 号土坑	190	130	60	隅丸長方形	逆台形	土師器坏、須恵器坏 炭化材＝クリ	平安	炭素年代＝ AD780 ～ 965　炭が広範囲分布 平安時代の炭焼き伏せ窯・小鍛冶炉？が隣接

※ 本表は大塚昌彦氏が作成した表を改編したものである。
※ 本書に掲載した類例は集成したものではなく、大塚氏がまとめたものから抜粋・一部追加したものである。

※1．大塚昌彦 「伏焼き法による炭焼き土坑 －薬師・半田中原遺跡の製鉄関連炭焼き土坑－」『群馬考古学手帳 10』
群馬県土器観会　2000

※ 参考文献
「半田中原・南原遺跡」 群馬県企業局・渋川市教育委員会　1994
「渋川市内遺跡Ⅻ」 渋川市教育委員会　1999
「白井遺跡群－集落編Ⅰ－（白井二位屋遺跡）」 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
「新堀東源ヶ原遺跡」 群馬県教育委員会・松井田町遺跡調査会　1997
「人見中の條・人見中の條 2・人見大王寺・人見正寺田遺跡」 松井田町教育委員会　2001
樋口清之 「木炭」 ものと人間の文化史71 （財）法政大学出版局　1993

写 真 図 版

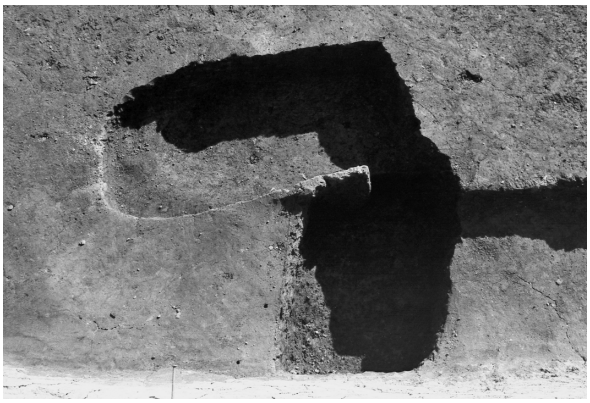
遺跡全景　東から

遺跡全景　西から

1 ～ 4 号焼成土坑　東から

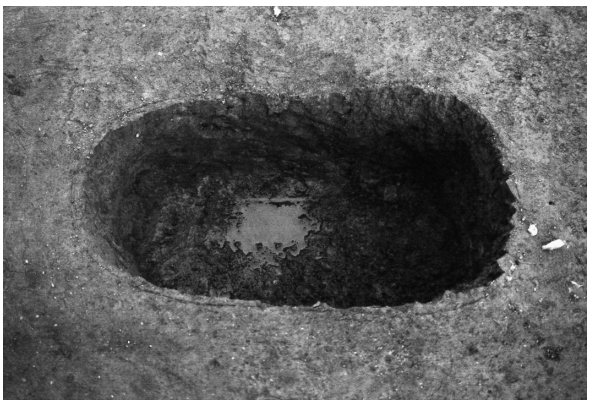
1 号焼成土坑炭化材出土状況　東から

1 号焼成土坑　北東から



2a・2b 号焼成土坑　北から

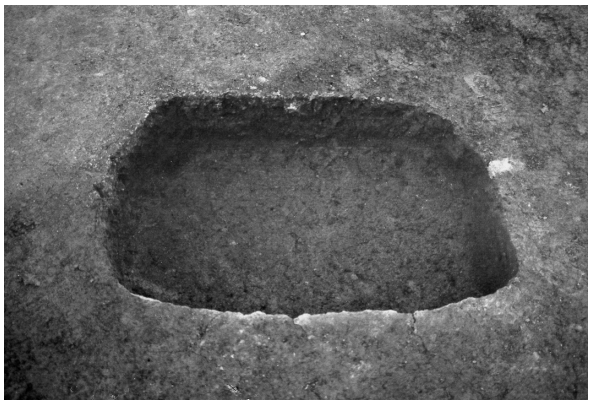
2a 号焼成土坑　南東から



3 号焼成土坑炭化材出土状況　東から

3 号焼成土坑　北東から

4 号焼成土坑炭化材出土状況　東から



4 号焼成土坑　北東から

1 号溝　東から

1
S ≒ 1/3

3
S ≒ 1/2

2
S ≒ 1/3

4
S ≒ 1/2

5
S ≒ 1/3

6
S ≒ 1/3

7
S ≒ 1/3

8
S ≒ 1/3

1：遺構外／ 2：1 号溝／ 3：1 号焼成土坑／ 4 ～ 8：1 号溝

出土遺物

報告書抄録

フリガナ	メイケイセキ 3		
書　　名	女池遺跡Ⅲ		
副書名	C地点の調査		
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第 26 集
編著者	太田博之・笠原仁史		
編集機関	本庄市遺跡調査会		
所在地	〒 367-8501 埼玉県本庄市本庄 3 丁目 3 番 3 号　　TEL 0495-25-1185		
発行日	西暦 2009 年（平成 21 年）3 月 13 日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査	調査
		市町村	遺跡	(°　′　″)	(°　′　″)		面積	原因
メイケイセキ 女池遺跡 （C地点）	ホンジョウシ　コダマチョウ 本庄市児玉町 キタバヤシアザフジイケ 吉田林字藤池 73	112119	305	36° 11′ 42″	139° 08′ 12″	19961001 ～ 19961031	70 ㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
女池遺跡 （C地点）	生産 不明	奈良 不明	焼成土坑 溝	土師器 鉄製品、礫	炭焼き土坑 真間期主体

要　　約	奈良時代に帰属すると考えられる焼成土坑を5基を確認。いずれも壁面が被熱していること、底面に炭化（灰）層が認められることから“伏せ焼法”による炭焼き土坑と推定される。

本庄市遺跡調査会報告書　第26集

女 池 遺 跡 Ⅲ

－Ｃ地点の調査－

平成21年３月５日　印刷

平成21年３月13日　発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501　埼玉県本庄市本庄３丁目５番３号
本庄市教育委員会内

電話　0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社